



Eld: KouMUKAI
2-12-2 ASAHIMACHI ABENO, OSAKA, JAPAN 551

10.Jul.'82. №. 260

ドーム通信 向井 孝

大阪市阿倍野区旭町 2-12-2

▼ いま、ぼくの毎日六時半、頭の中の半分を占めているのは、九月五日のハラ大集会のこと、とくにどうやってたくさんの人に参加してもらえるか、だ。この種の集りは、大阪ではまあ五百人・最大の努力をしても前例的には三百を超すくらい。せめて三百人・四百人のものにして、そのことに賛成でござる。つまりぼくの未知の人脈とつながりの人に、どれだけこの期間中に出会えるか・それと・日頃の交説によつて、ぼくの知己友人先輩たちが、支援の支援といふか・あいつのやることやらましょがない…といったことをも含めて、この集会のひうがりのための助つ人に、どれだけ応えて下さるかーである。日頃の疎遠や勝手をいまさら思い出しながら、たゞお力添えをとお願いする。

▼ このごろは「その日その日」とうつた緊張感がだんだんうすれてきて、せいぜい留意してるのは名古屋らしいこと。もうその時はその時や、のノンビリ気分。



▼ 6月18日 軍事費不払い特別講座・へ草の根の反戦がはじまるときく一算面忠魂碑訴訟の神坂玲子さんを聞くでー

いままで神坂さんの話を何回もきいたが、この夜の語が一番おもしろく、感動的だった。はじめ部屋一ぱい超満員の上にNHKがまひるながらのライトをむらこんで撮影(ソーラー)15枚。時々ドキュメンタリー放映したりしていったので、ちょっと固苦しいムードだったが、だんだんいつも雰囲気になつて、笑つたり・大声をあげたり・すっかり井戸端会議的。

印象に残つたこと二三をかきとるとー
★ 幸福なし裁判の功罪 ①はじめは裁判官にバカにされた部分があつたかもしれない。がそのうちなんざへ素人でも見直してもらそただろうと思つてゐる。どううと云うのは、準備書類を、云々とくるべく神坂さんのダンナ)がつくつた。

それをみんなが内輪同士の気安さで叩くというやり方をした。② 幸福なしだと原告の結束は、じゅあうなくつまる。③ 素人だといつもとて、何でもわかる。それを意識的に使つた点もある。

④ 善惡恩怨を自分のものと裁判をすゝめることができた。★ 忠魂碑に公共団体があ金を出すということは、一つの生き方・つまり一人の人間の死に方をよしとするところにおいて、他の生き方・死に方を差別的に区分することだ。宗教性あるのは慰霊の問題だけにとどまらない。★ 原告のうちは女。男の人はその女たちのダンナ。何故女が多いかなどと、地域で男同士のつきあいはない。女はいざれも専業主婦で、ローハウスで知りあつた仲。女だからこそできた。女がやるのは何かと大へんだったうつと云われるが、



6月30日 つるか 勧遊事務所付近路上

(上段左端より)せせがからくそいいのかナーと思つてゐる。(このことはぼくにとまも示唆的だつた。) ★ いやがらせや脅迫の手紙では、団体へ会より戦友会へそれを何人かうだと数人生き残ったといふ(?)のすさまじさは、とてその比ではない。戦友の死がしみついて、しまも一しょに生きている。それだから反対してゐるのに私たちのひとひとつながらなし。そういうものがあるのだといういふ勉強をした。★ 韓国人が日本へきて靖国神社がまだあるのにびっくりしたそうだ。私は、忠魂碑があるのにびっくりしてはじめたのやけど…。

▼ 6月22日 原闘連・反原燃拡大寺川屋へあ、恐ろしや高速増殖炉もんじゅ」中川さんの具体的な現地状況報告と、四月不払い連で描いた中島哲生さんの声が重なつて、敷質へいくかいかぬか、いささか迷つていただけたのが、やはりいこうとこうとにー。

▼ 6月23日 原闘連・反原燃拡大寺川屋へあ、恐ろしや高速増殖炉もんじゅ」中川さんの具体的な現地状況報告と、四月不払い連で描いた中島哲生さんの声が重なつて、敷質へいくかいかぬか、いささか迷つていただけたのが、やはりいこうとこうとにー。

▼ 6月24日 原闘連・反原燃拡大寺川屋へあ、恐ろしや高速増殖炉もんじゅ」中川さんの具体的な現地状況報告と、四月不払い連で描いた中島哲生さんの声が重なつて、敷質へいくかいかぬか、いささか迷つていただけたのが、やはりいこうとこうとにー。

▼ 6月26日 神戸エンカウンタースクール・シネマ×ツセージ・死刑台のメロディー上映・映画が感動的でしゃべるのが、しささか白けるおもじたつたが、約25分・代理と大連事件としてマジアジア方面武蔵戦線のことなどにふれて、一生けん命ぼくのおもいをしゃべらせてもうつた。以前で講演ふうに話すことを一切ことわつては、ほんとに久しぶりである。

▼ 6月28日 市民住民運動協援会議パンフづくり打合せ会 中止・加島西護士を中心へビラマキ、ズテハリ、検問不審尋問・がサ入れ・逮捕につけての、わかりやすく対策の

（詩人との一時間）

ハウ・リヴァのパンフづくりをはじめている。これからいよいよ激しくなる弾圧に備えて、ぼくらの側からの攻撃として、そら下書き原稿は70%ぐらいできてきて、あと数回へ打合せで仕上げて…という予定。乞う期待。（提灯モチ ひとつ。どうやら南北、島西弁護士のこと。一方、プロティルジラ事件のおかげで南北弁護士とじつくなれた2とで、ぼくは大迷惑されると、さうした時に感謝状を出したい位。南北弁護士とそれぞれつきあわせ、つまみうほどエエンで、それぞれの持味があり、ホンマに弁護士？にしどくれは様子っぽく、弁護士としてぼくらの運動の大好きな支えになつてくれる弁護士／（ややこしいが、方やけど）何かのときは紹介します。但しお金はねうこと、今回のパンフも、むしろ南北弁護士が推進力で、ぼくらの方がおくれてる）

▼ 6月29日 東アジア反日武装組織に連帯し、あるいはその裏面を越えて支持支援しまだなみ死刑廃止攻撃を車両などのとして反対し、その他野次馬でもなくとも、どちらかく胸心をよせる者、みんなの大連合ハラハラ大集会 や一回相談会。呼びかけて集つた人36名。（その中に、6月ESでの話をきいて、どうかがよくもじて、ぼくは感激した）9月5日 明116、大阪上六三和会館ホール、集会タイトルへハラハラ大集会－日本くであることに責任をとらうとした人たち、東アジア反日武装組織の死刑を許せるが、集会内容は、フォーク・ロック・フレミング・リック・ナ劇・舞踏・ストライド・映画・獄中者からのメッセージ。参加者発言／（分論アピール）シンボル（一時間）など。集会の性格は、はじめにカーテンスクリーンをよんだらしく名をあてつけた、そのつけ方でほり割つてもらえるつもり。その集会となるのは、東アジア反日といつても、若い人は全くといつてよいほど何も知らないという状況、そして新聞記事的にわざかに知つている人たちの知り方、殆ど沉默と無視、その心裡にある、口にその名を出すことすら憚りあそれるといつて、状況のなかで、この集会がどのようにしてほりづいて、語りかけうるか、である。もつといえど、この集会のやり方とそのさまである表現の全部を通じて、9・5前後に出来る高裁判決を改めてみんなが自分のものとしてたどりきつかけを提示でいるカーテンとよんで用意している。



▼ 6月30日・7月1日・2日 不払い連と女ケループの仲間計11名、つるぎ行き、もへじゅヒヤリング廃止園等に参加。やるべきことを十分やれなかつたがいい経験をえた。へ不払い連の「おさきまつくり」にふうとこうでゆくので、ここでは省略。（一面のやうは、6000人が市内をおむあみだぶつ・向田退散を唱えて、無届けモト・申入スナップ）

▼ 7月5日 死刑廃止園遊客センター・学習会へ仏教説話に見る罪と罰と、死刑廃止／僧侶のあるところが、はじめに「仏教」についてのアウトライン、ついで前回講座でや次々が引例された「指輪外道」の話を、ゴードーのテキストで読み、どううけとめるか討論／この説話で、そもそもその事のところは、指輪外道の師匠バラモンの師にあるのに、すべて個人の煩惱解脱という肉的な解決になつていて、ちよつと心にひつかかつた。教説で念仏を唱えて歩いたときの感覚と仏教とが何とななく立ちがう感じ。

▼ 7月7日 不払い連しごと塾。ひとしきり、つるぎでの経験話・講壇とM.B.Sテレビにぼくらの英姿が放映されたとか。町じんの機動隊に向つて一列横隊、念仏をとなえて、一步一步歩いていく。映画的シーンはなかなかないとして、残念がつたり、また品嘗したり。

* ここ数ヶ月、出来た行動があれ、イオム航行もあくまでも、今日は走るが、のまじめな現象を示す。

▼ ぼくには、三・四ヶ月に一回発行のコスモスに出す詩一篇が、なかなかつかない。だからつづき月一篇以上も、詩を発表する同人たちみると、非凡な能力をもつ手品師のようだ。

もともと、よく考えてみるとぼくも、月数篇の詩をかいたときがあるわけでも、そのとくどうだったかを思いだせば、多作？のコツはおよそのところ判るはずだ。つまり、第一に、そのころぼくはいつも「詩をつくろう」と、心をよろきよろさせていた。半ば無意識に、それこそ「詩のタネ」をいつもさがしていた。

第二に、「詩のタネ」といつても、どこにもころがっているわけじゃない、ちょっとしたコツがある。ぼくがタネをみつけるのは、自分の身の廻りの例えは「囁き風景」だ。それに焦点をあてて、あまり構えず気軽に近づけば、近づくほどにタネはいくらでもある。（第三は、そのとり出したタネを、土にまき水をやり、日なたに出せば芽が出て葉がのびる。ぼくの場合早く一日、長ければ十日ぐらいで、まあ大てい何とかなる）

一とすれば「詩がかけない」のならこの原点に戻ればよい。しかし問題はこの第一、第二がいまのぼくに通用するかである。

▼ ところで、このころのぼくの日常は、来訪者や若い仲間との応接、郵便の整理、会合集会行事活動の準備と参加、機関紙やビラの原稿や版下書き、印刷と発送というもので毎日が終始する（と云うと、えらい忙しそうだが、たまには一、二時間パチンコをしたり…）で、ともかく当座のこととに追われて、詩を考えるのに一、二日なんてゆとりは、なかなか出てこない。

もちろんコスモス原稿／切りの十日前ぐらいうになると、ああ、と何度も思い出す。そして許されるときは、当面の日常事を放り出して、詩をつくろうという気分になる。

そこで第二の問題—詩のタネさがし—が出てくるのだが、前述のようなぼくの日常の主な关心やいまの興味は、ぼくがみんなと一緒にやっている一反戦、反公害、反差別の一事市民運動のなかにある。そして詩もまた、そのこととながついていることで、はじめてぼくの詩となる。ということから云えば、例えは他人事みたいな「囁き風景」をタネとして、ぼくには詩をかく気が、もうどうしても起らへん。

そこで、せいぜい身辺日常の事件や、うごきをとり出して、風景的にえがくとというのが昨今のぼくの詩である。だがそうなると今度は風景になるような事件が、なかなかない。

▼ 一方ぼくにとって、ほとんど「詩」ができるのとかわらない営為として、「ピラ」がある。そして「ピラ」つくりは、ぼくの日常の中で、それこそ一日常から隔離された気分と時間なしで一詩を仕上げるような気分もたらすものといえる。もっともぼくの内部では、ピラつくりは例えは「風景的描写」のようなもの全く考えないという一点で、詩作とはちがっている。そしてむしろ、詩をかこうとするときのぼくの方に、すこし他人のよくな分裂感を持たないでもない。

詩と日常、あるいは運動とは、ちがつて当然かもしれない。にもかかわらずぼくにおいてひとつであつてよいではないか、といふ感じがどこかにある。そして、ピラつくりのようだ「詩」を、いつの日かつくる方法をみつけたい、というのが、ぼくのこのころのふとしたねがいなのである。向井